内ニ御座構、四方ニ案ヲ置燭ヲ立、上ニ火舍花置、掃部寮主殿寮庭燎立明沙汰之、内掌燈女孺勤之、
出御　御簾　關白或頭中將頭辨モ勤之　御裾　御劔　左右中將勤之　御笏　職事勤之
御草鞋　内豎奉之　脂燭　中將、少將、侍從、六位藏人勤之、　奉行職事　假橋　修理職勤之　太
宋屏風　出納勤之　御座筵道　掃部寮調進之　案　木工頭同　火舍　圖書頭同　布毯　内
藏寮官人勤之　庭燎　主殿寮調進　立明　同勤之　脂燭　御藏調進　内掌燈　女孺勤之
御草鞋　内豎獻之

〔嘉永年中行事〕正月朔日四方拜　寅の刻の定なれば、とくより御ひるなる、常の御座にて先御手水をめす、釜殿御湯を運ぶ、女官取傳へて御湯殿を構ふ、御陪膳の典侍事具するの由を申せば、御湯殿に渡らせおはします、同人御湯帷を奉る、御湯終りて常御殿上段中央の御座に渡らせおはします、典侍袴をきて御鬢をかき御冠を奉る、垂纓紙捻を御かけあり、又御襪を奉る、下の大口ばかりをめす、御束帶あるべき料なり、典侍御前にて御笏紙を押す、次に御裝束を廣蓋に載ながら、下段の中央の南の方にて御服の人に授く、清涼殿迄は常の御袴を大口の上にめす、次に清涼殿へ出御なる、内侍燭をとりて御さきに行く、次に勾當内侍晝御座の御劔を持て參る、内侍御笏と式とを箱の蓋に載せ持て御供す、朝餉の御座に著御なりぬ、次に略○中御裝束の後同所にて御清手水供ず、御陪膳御前に參り、御脇足を御前に置く、次御楾角だらいを供ず、ぬきすを角だらいに引廣げ置く、是よりさき御手水の中に入楾の蓋を打返して、其中に深草土器ひとつを伏す、かはらけをとらせ給ひて、御口を三度すゝがせ給ひて後、土器をたらひの中へ抛させ給ふ、御陪膳楾を御手水の中より取出し、打返したる蓋をし、改めて御手水をかけ參らす、手拭には小鷹檀紙を用ふ、御手水女中障りあれば、内々の男方奉仕す、寅の刻許に額の間より御草鞋をめして出御なる、關白御裾に參る、不參なれば藏人頭つとむるなり中少將の人晝御座の御劔を持て參る、職事御笏と式の箱を